

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530775

研究課題名(和文) 専門家としての自己生成プロセスにおける「痛みを伴う臨床体験」がもつ意味の探求

研究課題名(英文) An Exploratory Study of the Meaning of Social Workers' Experience with Pain on Professional Self Generating Process

研究代表者

福田 俊子 (FUKUDA, Toshiko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：20257059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの自己生成プロセスにおいて、変容を促す臨床体験、すなわち「痛み」を伴うような「節目」となる体験がもつ意味を探求することを目的とした。「節目」となる体験は、「状況に巻き込まれ」たり、「利用者にふりまわされ」たりといった特徴をもち、受動性や偶然性を伴いながら、援助者をゆさぶり、専門家であることの手間にある「人として」のあり方を問い、それによって専門家としての基軸が形成されることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to explore the meaning of social worker's experience (with pain) in mental health at an important stage of professional self generating process. It is characterized by "getting involved in a situation" or "giving in to others", including passivity and contingency. And it forms the foundation of social workers through asking themselves a question about "who really I am".

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：痛み 節目 ソーシャルワーカー 自己生成

1. 研究開始当初の背景

我が国における対人援助職の成長や発達にかかわる研究は、1980年代以降から看護分野を中心として進められてきた。中でも、現象学的アプローチを用いた看護師の技能習得にかかわる一連の研究は、看護のみならず教育分野にも大きな影響を与えている。しかしながら、社会福祉分野においては技能取得に着目した研究が全くなされていなかったため、筆者らは精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカー（以下、ワーカー）を対象としたインタビュー調査を、2006～2008年に実施した。その結果、ワーカーの自己生成の基軸は単なる技能習得ではなく、「専門性をいかに捉えるか」という点も重要であることが明らかとなった。

そして、調査協力者の多くが「失敗」「憤り」「ふりまわされて疲れた」といったネガティブな感情や何らかの「痛み」が伴う臨床体験を語っていたという結果は、非常に興味深いものであった。臨床経験30年以上を有するエキスパートワーカーであるB氏によって「まるで昨日の出来事のように」語られる内容は「未だ過去にはなっていない」体験であり、「生涯忘れることのない『痛み』として身体に刻み込まれた」体験となっていた。このことにより、臨床体験は想起されるたびに、自己を体験当時の過去に連れ去ったり、現在に連れ戻したりしながら、何らかの形で現在の自己と結びつき、時間をかけてワーカーに意味づけすることを促していることが示唆された。

以上のことから、専門家としての自己生成は、直線的な時間の流れ、いわゆる物理的時間の枠組みの中だけでなされていくものではなく、とりわけ「痛み」を伴う臨床体験は、体験そのものが持続的にワーカー自身へ働きかけるといふ作用を有しているように捉えられた。

2. 研究の目的

以上のような経緯を経て、本研究では「痛み」を伴う臨床体験に着目し、この体験が専門家としての自己生成プロセスでどのような意味をもつのか、現象学の知見を手がかりとしながら、解釈し、記述することを当初の目的とした。

しかしながら調査を進めるうちに、ワーカーとしての自己生成上の変容に影響を与えているのは、必ずしも「痛み」を伴う体験だけではないことが明らかとなった。そこで、本研究では、臨床体験にあてる焦点を「痛み」

から「節目」へと拡大することにした。

3. 研究の方法

(1) 研究方法

本研究では、専門職としての自己生成プロセスにおいて影響を与える概念を抽出し、その概念同士の関係を明らかにするモデル開発を目指さない。ワーカー自身が自己の生成プロセスに影響を与えたと認識している体験を構成する、重要な要素間の連関を明らかにすることを通して、その背後にある、各要素を支える運動や構造を見つけ出し、記述することを目的とする。具体的には、主としてナラティブ・データを用いて、重要な臨床体験がどのような状況の中で生起し、そしてワーカー自身の中でどのように持続しているのかを明らかにする。したがって、データを徹底的に個別分析する必要があるため、事例研究法を用いた。

(2) 調査の概要

調査協力者

前回の調査は、1999年に世界心理リハビリテーション学会による、我が国におけるベスト・プラクティスとして選ばれ、「ワーカー集団」を形成しながら実践活動を展開してきたという特徴がある地域のワーカーに調査を依頼した。しかしながら、エキスパート及びベテランワーカーが育ってきた時代背景の中で、すべての地域でこのような実践活動が展開されてきたわけではないため、今回の調査では、むしろそのことが困難であった地域を選定し、追加した。

調査協力者は、19名に依頼し、17名より承諾を得た。学生1名を除く16名全員が精神保健福祉士の資格を持つ、現職のワーカーである。そのうち10名は、筆者らが前回実施した調査に協力していただいている。

臨床経験の内訳は、20年以上のエキスパート・ベテランワーカーが10名（最長45年、最短24年）、経験年数8～20年未満の中堅ワーカーが6名（最長16年、最短8年、平均12年）である。

調査の手順・方法

調査は、いずれも筆者が所属する大学院の研究倫理委員会の承諾を得た上で、2012年8月～2014年3月に2つの方法を用いて実施した。1つは、今回2度目の調査依頼となる協力者には、調査報告書・トランスクリプト・音声データを郵送した後、調査概要を文書及び口頭にて説明し、同意を得てインタビュー調査を実施した。調査における主たる質

問項目は、報告書等及び前回の調査で取り上げられている体験にかかわる所感、の臨床体験が、その後のあなたに与えた影響、今のあなたにとって、重要な臨床体験、または専門家としての「節目」となった体験とは何か、である。

もう1つは、今回新たに依頼した協力者及び学生に対する調査である。これは前回の調査と同様、予め記入いただいた調査票をもとに調査を実施した。調査票では、協力者にとっての「重要な臨床(実習)体験」を2項目に分けて尋ねた。すなわち、協力者が「これまでの臨床経験」及び「最近の業務(実習)」を振り返る中で、自分にとって重要である体験を自由に記入していただいた。

両調査ともに、原則として協力者1名に対し1名ないし2名の調査者で、60~90分程度の半構造化面接を2回実施した。延べ面接回数・時間は、最大4回、640時間、最少は2回、137時間、1人あたりの平均は262時間となった。

(3)分析方法

事例研究法には、論者によりさまざまな捉え方があるが、本研究では、「事例固有の物語は何か」を問いながら、データで語られている内容や語り口の特徴・変化に着目し、「時間性」及び「受動性」などの観点から分析した。

4.研究成果

ここでは、まずはワーカーの自己生成プロセスにおける変容の「節目」となる体験の特徴2点について、代表的な事例を用いて説明する。

(1)「状況に巻き込まれる」という体験

これは主として「利用者との直接的なかわりを通じた体験」として語られた。具体的には「思いがけない体験」すなわち「予測できなかった体験」として、かわりに行き詰まる「失敗体験」であったり、「利用者がワーカーの予測をはるかに超えて変化する」といった「成功体験」などを通じ、利用者の可変性を信じられない自己の内なる偏見を自覚させられたりする体験であった。

前回の調査においてB氏は、自らは「利用者のために」と思って実施した援助が、実はその家に土足で踏み込んでしまう結果に終わっていることを、他職種から指摘されて気づくという、臨床2~3年目の失敗体験を語った。2度目となる今回の調査でも、自分の中で今なお生き続ける本体験を振り返り、当

時の自分の決定的な問題は「尊厳」に欠けた態度であり、その「尊厳」こそが「ソーシャルワーカーの専門性の中核」とであると意味づけた。

一人前の専門家になる上で、価値・知識・技術を修得することで、援助のバリエーションを増やし、専門家として「できること」「やれること」を増やすことは、当然重視される。しかし一人前の段階を通り越してエキスパートの段階にあるB氏は、専門家としては「やること」ばかりでなく、「やらないこと」を見つけることが重要だとし、そして「ワーカーとして最後に残るものがあるとすれば、それは『尊厳』である」と語った。

本体験は、40年以上B氏自身にまわり続け、本人をとりまく状況がいかに変化しようとも、B氏を「当時の状況へと巻き込む」体験となっている。「『過去』の状況に巻き込まれる」という臨床体験は、それにまつわる想起が繰り返されることによって、意味づけを複層的なものへと変えていく。すなわち、B氏の中で、当時の本人・家族関係、あるいは家族と病いの関係だけでなく、病いと社会との関係を含んだ「歴史性」を視野に入れた意味づけがなされると同時に、「尊厳」を守るという「専門家としての基軸」が形成されていくのである。

さらに「利用者との直接的なかわり」といった状況だけではなく、利用者や職員で構成される「臨床の場」そのものに巻き込まれるという臨床体験もある。臨床経験20年以上を有するエキスパート・ベテランワーカーのM氏及びO氏は、ともに新人ワーカーとして「病棟という臨床の場」に投げ出された際、「病者」として生きることを強いられる病棟の生活支援に直接携わるうちに、その場のあり方に「強い違和感」を抱いたと語った。そして、この体験が出発点となり、「病者」ではなく「生活者」として生きることが可能な病棟へと、変革を促す実践を展開していくようになるプロセスが語られていった。

その一方で「状況に巻き込まれる」体験は、「利用者とのかわり」や「臨床の場」の中だけで生起するわけではないことも明らかになった。ワーカーが職場を異動したり、職位が変わり管理職になったりと「職場環境」が変化するという状況も含まれるのである。このことが顕著に表れていたのが、一人前または中堅ワーカーの語りであった。

筆者らが前回実施した調査の時点で「一人前前期・後期」に位置づけられていたワーカーが、6年後の今回の調査では「一人前後期」

または「中堅」の段階へと移行していた。これに該当するワーカーは6名であり、いずれも体験の語りには大きな変容が見られた。

前回の調査において、I氏及びJ氏の両ワーカーは共に、利用者に「ふりまわされる」という「巻き込まれた」体験を語るも、「何が問題であったのか」「どうすればよかったのか」といった問いに対しては、自分なりの答えを見出すことは困難であった。その後、制度改革による事業の拡大に伴い、両者は職場を異動したり、一緒に働く職員が大きく入れ替わったりと、職場環境に大きな変化が生じた。現在は管理的な業務も担う立場となり、個別援助という直接援助から、機関調整などといった間接援助へと、主たる仕事内容も変動している。

以上のような「大きな職場環境における状況の変化に巻き込まれる」という体験を経て、今回の調査において両者は、共にかつての「ふりまわされる」体験を「客観的に」語り、そして意味づけし、ワーカーとしての自分の個性についても、明確に表現するといった変化が見られた。具体的には、自身が上司に「育てられる」という受動的な立場から部下を「育てる」という能動的な立場へと変化する中で、仕事を一人で抱え込まずに協働し、複数のモデルとなるワーカーと自己を比較しつつ、自分の個性を生かした仕事のスタイルを確立してきたことなどが、詳細に語られたのである。

(2) 「ふりまわされる」という体験

「利用者とのかかわり」で生起する「状況に巻き込まれる」体験の中には、「ふりまわされる」という体験がある。前回の調査においては、この体験は、新人や一人前前期の段階にいる協力者によって、語られることが多かった。今回は「ふりまわされる」体験について、初学者である学生の実習体験にまつわる語りを通して、「素人性」という観点から検討した。

具体的には、認知症のため「帰宅願望」を訴える利用者Qさんが、短期入所サービスを初回利用する際に立ち会うこととなった実習生Pさんとのかかわりの経過に関する詳細な語りを分析した。以下にそれを示す。

社会福祉施設という見知らぬ生活空間に突然投げ出された利用者Qさんは、自分の居場所を求め、異物の空間に馴染もうと徘徊という行為を続ける。見ず知らずの人々とともに慣れない空間で、一定期間生活することを拒否する利用者は「『施設にいる』という現

在」を、当然否定する。そして「過去とつながっている『家に帰る』という未来」を志向し、それを希望として訴えることになる。一方、実習生Pさんは、本人の希望を叶えることはできず、何とかこのまま「Qさんを引きとめておくこと」という「現在」を志向した対応をすることになる。これは、まさに実習生が「援助者としてのかかわり」を代行する行為である。

両者の時間軸における志向はまったく逆の方向となるため、コミュニケーションは徐々に自然と行き詰まる。つまり「援助者としてのかかわり」が遂行できなくなるプロセスで、Pさんは「すること」に懸命になるものの、そのかかわりを拒絶され、結局は「いること」しかできなくなるというジレンマに陥ることとなった。「能動的」な働きかけを志向しつつも、「受動的」にならざるをえない状況へと追い込まれていき、PさんはQさんに「ふりまわされる」ことになるのであった。

そして、対応に窮したPさんは、ついに「嘘をつく」というその場しのぎの「対処行動」をとってしまう。それに対しQさんは激怒し、Pさんは謝罪するも、Qさんの怒りはおさまらず、2人の関係には一旦終止符が打たれることになる。

対処行動は、利用者の未来への志向を遮断し、現在に閉じ込めるという統制する力をもつ。その力への抵抗が、Qさんの「激怒する」という反応だったのである。また、現在を否定し、過去とつながる未来も遮断されたQさんに、もはや時間は流れなくなっている。だから、流れない時間にもう一度流れを呼び戻す試みとして、Qさんは「激怒する」という行為を選択しているように思われた。怒りをぶつけられたPさんは無力感を抱えるものの、「自分が未熟だからQさんを怒らせてしまった」という素人としての自覚があったからこそ、「ああ、ごめんなさい」と、Qさんに対し素直に謝るのである。もしも怒ったり論じたりといった統制しようとする力を加えて対応していたならば、かかわりは一方通行となり、Qさんが怒って反応するという隙間を与えなかったであろう。

しかしここでは、統制する力は全く働いていない。むしろ、Pさんの「人として」の素朴な感覚が「謝罪」というかかわりを生成し、Qさんの自由な感情表出を可能にしているのである。つまり、素人性は「かかわりの余白」を生成する可能性を有しているのである。

その後約2日間、2人の間に具体的な交流

はなくなり、「かかわりの空白」が訪れる。そして3日目に、2人が初めて言葉を交わした場所で、かかわりが復活する。QさんがPさんに向かって、「あなたには世話になった。ありがとう。」という感謝の言葉を突然投げかけるのである。2人がいたフロアはそれほど広くはないため、互いの存在をまったく気にせずに1日を過ごすことは不可能である。Pさんが「Qさんを避けていた」という行為が、「敢えてQさんに『働きかけをしない』気遣い」として、Qさんに伝わっていた可能性がある。このような気遣いがあったからこそ、QさんがPさんに感謝するというやりとりが実現したと言えるのではないだろうか。

「かかわりの空白」は関係の消滅・断絶ではなく、新たな関係を生み出す準備期間であり、そこには気遣い・気遣われるという関係が存在しているのかもしれないのである。

以上のことから、素人性は、「人として」の「かかわりの余白・空白」を生成する可能性を有するのである。

また、一般的に「ふりまわされる」体験は、専門家としての知識・技術不足として捉えられ、ネガティブな意味を付与されることが多い。しかしながら、上述した両者のかかわりを通じて明らかになったことは、援助する側にいる者がふりまわされることによって「無力」な状態となることは、援助者もまた当事者となり、援助する者・される者という境界線がなくなることを意味するのである。すなわち「ふりまわされる体験」は、利用者と援助者とのあいだに「対等な関係」を導く機会を提供するというポジティブな側面も有するのである。

(3)「節目」となる臨床体験の意味

以上のことから、ワーカーの自己生成プロセス上で「節目」となる臨床体験のうち「巻き込まれ」「ふりまわされる」という体験を吟味した結果、以下の点が明らかとなった。

第1は、いずれの体験もワーカー自らが意図してかかわり、予測通りの結果が得られたものではなく「体験してしまう」といった「受動性」、及びそのような「体験と出会ってしまう」という「偶然性」を孕んだものであるという点である。これらを孕む体験には「予測のつかなさ」がつきまとう。「未来の先取り」が不可能な体験であるがゆえに、ワーカーは専門家としての構えをゆらがされることになるのである。

しかしながら、「受動性」や「偶然性」は、巻き込まれたりふりまわされたりといった

体験のみと必ずしも結びついているわけではない。ベテランワーカーのD氏は、利用者の自由な生き方に触れることで、自身の「人としての生き方」にも影響を与えられたと語っている。これも利用者に教えられるという「受動性」を伴う体験である。

第2は、「ふりまわされる」体験を中心とした「痛み」を伴う臨床体験によってワーカー自身がゆらがされる事象(B氏、M氏、O氏、Pさんの体験)は、初学者から新人、あるいは一人前になる手前の時期に生起することが多く、これらは「専門家としての基盤」を形成する契機となっている点である。

第3は、「ふりまわされる」体験(B氏、M氏、O氏、Pさん)などは、「専門家としての自己に不足しているものの自覚を促す感覚」を基点としながらも、専門家としての自己ではなく、専門家であることの手間にある「人として」のあり方が問われることになる点である。

これらの体験を通じて、ワーカーは「専門家として自己に不足しているものは何か」と自問自答を繰り返しながらも「無力感」を抱くようになり、この状態がある程度維持されるプロセスにおいて、ワーカーからは「専門家としての鎧や仮面」が消失し、「ひとりの人」として利用者に対峙することが迫られることになるのである。

第4は、「ふりまわされる」体験(B氏、M氏、O氏)などが、長い臨床経験を経る中で、ワーカーの「専門家としての基軸」が形成される契機となる点である。

B氏は失敗体験を「否認」することなく、「棚上げ」しつづけることによって、「『尊厳』を守るためには、『やらないことを見つけること』だ」という「過去・現在・未来」をつらぬく自身の実践基盤、すなわち自己の実践を支える基軸を形成しているのである。「否認」は体験をモノ化し過去に封じ込める。それに対し「棚上げ」とは、体験をモノ化せず、コトとして、時に開かれたまま、その人の中においておくことなのかもしれないのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

福田俊子, 『素人性』によって生成される実践 - 初学者の「ふりまわされる」体験から見えてくるもの - 『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』11号, 査読有, 2013, 1-13頁

〔学会発表〕(計1件)

福田俊子,『『素人性』によって生成される実践 - 初学者の「ふりまわされる」体験から見えてくるもの - 』『日本社会福祉学会第61回秋季大会』, 2013.9.21-22,北星学園大学

6. 研究組織

(1)研究代表者: 福田俊子 (FUKUDA, Toshiko)
聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・
准教授
研究者番号: 20257059

(2)研究分担者: なし

(3)連携研究者: なし